

第25回（平成28年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業



ບ້ານໄພບມື ບ້ານທີ່ຕັ້ນໄປດ້ວຍກອຍລື້ມ

笑顔あふれるポンミー村



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

公益財団法人 鹿児島県国際交流協会

はじめに



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
会長 弓場 秋信
(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、平成3年3月に中高生をマレーシアに派遣以来、今年25回目を迎えました。開発途上国で「国づくり、人づくりに貢献する」青年海外協力隊員の活動現場に鹿児島の青少年を派遣し、国際協力に対する理解を深めると共に、ホームステイ等での異文化体験、学校等での現地学生との交流を通して、国際性豊かな青少年を育成することを目的に、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、青年海外協力隊鹿児島県OB会、公益財団法人鹿児島県国際交流協会で構成された実行委員会で実施しています。これまでに、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオス、カンボジアの6ヶ国に県下一円から今回の14名を含む315名の中高生を派遣しました。

青年海外協力隊は、アジア地域で社会貢献などに傑出した個人や団体に贈られる「アジアのノーベル賞」と呼ばれる「ラモン・マグサイサイ賞」を今年9月2日に受賞しました。昨年50周年を迎えた青年海外協力隊の、アジア地域の経済と社会の発展への貢献が認められての受賞となりました。

今回の派遣国ラオス人民民主共和国は、ASEAN 加盟10カ国中唯一の内陸国で、青年海外隊発足後最初の派遣4か国の1カ国です。以来、内戦時に一次派遣が中止されましたが現在は59名が教育、行政、医療保健等の分野で活動中です。

本事業の共催市である鹿児島市、鹿屋市、霧島市、枕崎市、南九州市、南さつま市からの推薦10名と、企業の協賛を得ての実行委員会枠4名は、2回の事前研修でラオス語、ラオス事情、青年海外協力隊活動と国際協力、日本・鹿児島について学び、7月24日～31日の日程で、ASEAN+3（日中韓）首脳会議が開催されるラオスビエンチャンに向かいました。

団員は、ビエンチャン県ポンミー村での4泊のホームステイ期間中に、助産師、日本語教師として活動している2人の青年海外協力隊員の活動現場の視察、ポンミー小学校での学生との交流、そして村民との文化交流を行いました。そしてJICA ラオス事務所を訪問しラオスにおける青年海外協力隊事業や国際協力について説明を受け、団員からはホームステイ期間中の活動についての報告を行いました。

ここに団員の日々の体験・見たこと・感じたこと等が綴られた報告書「ບ້ານໄພນີ້ ບ້ານທີ່ຕັມໄປດັ່ງລະຄອຍໆໆ (笑顔あふれるポンミー村)」を作成致しましたので多くの皆様にご覧頂ければ幸甚に存じます。

終わりに、本事業実施に当たりご支援ご協力を頂いた共催市、協賛企業、国際協力機構九州国際センター、JICAラオス事務所、心温まるもてなしでホームステイを受け入れて頂いたビエンチャン県ポンミー村の皆様、そして活動中の青年海外協力隊員をはじめとする多くの関係者に、心より感謝申し上げますと共に、今後とも本事業へのご支援・ご協力を賜ります様お願い申し上げます。

もくじ

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓場 秋信

ごあいさつ 1

鹿児島県商工労働水産部観光交流局長 本 重人

第25回（平成28年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要 2

参加団員等名簿 3

スケジュール 4

地図 5

体験事業ドキュメント（総集編） 6

～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～

団員が感じたこと 17

「幸せ」	関 文 子
「ラオスに必要な支援とは」	保 野 稜 介
「本当の援助とは」	横 山 真由凜
「すばらしい経験」	福 田 楓 歩
「訪れて初めて知ったこと」	道 野 はるか
「援助することの難しさ」	二 宮 花 音
「支援とは？」	山 内 麻 未
「私とラオス」	大 倉 憲 生
「実際に見た海外」	有 田 真 衣
「海外研修」	上之門 優 里
「大きな愛」	外 堀 真 那
「ラオスを訪ねて」	柳 ひな子
「ラオスで体験できたこと」	久 保 日向子
「共に学び共に考える」	榎 屋 夢

団長報告 31

「鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書」
稻富 郁夫（鹿児島県国際交流協会 総務企画課長）

同行者感想 32

「皆さんに 2017」	坂 本 渉
「鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書」	大 坪 ま み
「好奇心を支えるもの」	後 藤 まどか
「生の現場と想像力」	西 悠 宇
「人生を肥やした一週間」	西 萌々佳

新聞記事（南日本新聞） 37

参考資料

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要	41
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績	42

ごあいさつ



鹿児島県観光交流局長

本 重 人

「第25回(平成28年度)鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。これも、事業実施に御尽力された弓場秋信実行委員会会長をはじめ、関係者の御支援・御苦労の賜であり、心より敬意を表します。

また、皆様方にはかねてから本県の国際交流・国際協力に関する施策の推進に格別の御協力をいただいておりますことに対しまして、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

今回の体験事業では、7月24日から31日まで7泊8日間の日程で、ラオスを訪問し、現地で助産師、日本語教師として指導活動を行っている青年海外協力隊員2人の活動現場を視察したほか、現地家庭でのホームステイ、現地の中高生との交流等を体験したと伺っております。

皆さんのが訪問されたラオスは、1965年に日本が初めて青年海外協力隊を派遣した国であり、1991年以降、日本は、インフラ、農業、教育、保健などの分野を重点分野として支援を行っています。昨年2015年は、日ラオス外交関係設立60周年を迎えるなど、両国で様々な交流事業が開催されるなど、活発な交流が行われています。

帰国派遣団員の方々は、8月3日県庁を訪問し、県教育次長及び観光交流局次長に帰国報告をされました。ラオスの食事など生活習慣や歴史に加え、人々の心の温かさ、さらには国際社会の協力活動が現地でどのように受け止められているのかなど、多岐にわたりたいへん興味深いお話をいただいたと聞いております。

今回の訪問で、団員のみなさんが自分の目で見て、感じ、考えてきたことは、実際にラオスへ足を運ばなければ体験することのできない、たいへん貴重なものだと思います。それらを心に深く刻み、今後の人生の糧とともに、これからも何らかの形で多くの方々に積極的に伝えてほしいと希望しております。

また、今後も様々な機会を捉えて、国際交流・協力や国際社会等についての学習を深められ、皆さんの今後の進路決定等に活かしていかれることを期待しております。

最後に、「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の今後ますますの御発展と、関係の方々及び団員との御家族の皆様方の御活躍・御多幸を祈念いたします。

第25回（平成28年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

1 主 催	鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 ※ 構成団体 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 青年海外協力隊鹿児島県OB会 公益財団法人鹿児島県国際交流協会
2 共 催	鹿児島市、鹿屋市国際交流協会、枕崎市教育委員会、 霧島市国際交流協会、南さつま市友好交流推進協議会、 南九州市教育委員会
3 後 援	鹿児島県 鹿児島県教育委員会 独立行政法人国際協力機構九州国際センター
4 協 力	駐日ラオス大使館
5 協 賛	鹿児島空港ビルディング(株) 鹿児島ヨコハマタイヤ(株) (株)下堂園 (株)山形屋 キンコー醤油(株) 薩摩酒造(株) 南国殖産(株) 鹿児島トヨタ自動車(株) (株)鹿児島銀行 (株) Misumi (株)レイメイ藤井 小正醸造(株) 太陽運輸倉庫(株) 弓場貿易(株)
6 事業の流れ	4月～5月 6月12日（日） 7月 2日（土）～7月 3日（日） 7月24日（日） 7月31日（日） 8月 3日（水）～8月10日（水） 8月20日（土） 9～10月 募集・団員決定 第1回事前研修 第2回事前研修 出発 帰国 表敬訪問 報告会 報告書作成
7 派 遣 国	ラオス人民民主共和国
8 派 遣 期 間	平成28年7月24日（日）～7月31日（日）
9 派 遣 人 員	(1) 参加者 14名 (2) 引率者 6名

参加者団員等名簿

■ 団 員

	名 前	性別	学 校	学年	市 町
1	せき 関 文 子	女	鹿児島純心女子高等学校	1	鹿 児 島 市
2	また 俣 の 野 稜 介	男	鹿児島市立吉野中学校	3	鹿 児 島 市
3	よこ 横 山 真由凜	女	鹿児島大学教育学部附属中学校	1	鹿 児 島 市
4	ふく 福 田 楓 歩	女	鹿屋市立鹿屋中学校	1	鹿 屋 市
5	みち 道 の 野 はるか	女	鹿児島県立川辺高等学校	2	枕 崎 市
6	にの 二 宮 花 音	女	鹿児島県立加治木高等学校	3	霧 島 市
7	やま 山 内 麻 未	女	学校法人都築教育学園 鹿児島第一高等学校	1	霧 島 市
8	おお 大 倉 憲 生	女	鹿児島県立加世田高等学校	1	南 さ つ ま 市
9	あり 有 田 真 衣	女	鹿児島県立川辺高等学校	3	南 九 州 市
10	うえ の 上 之 門 かど 雄 里	女	鹿児島県立川辺高等学校	3	南 九 州 市
11	ほか 外 堀 真 那	女	学校法人神村学園中等部	3	薩 摩 川 内 市
12	やなぎ 柳 ひな子	女	鹿児島県立出水高等学校	1	出 水 市
13	く 久 保 ほ 日 向 子	女	学校法人川島学園 尚志館高等学校	1	鹿 屋 市
14	えのき 檜 屋 ゆめ 夢	女	肝付町立内之浦中学校	1	肝 付 町

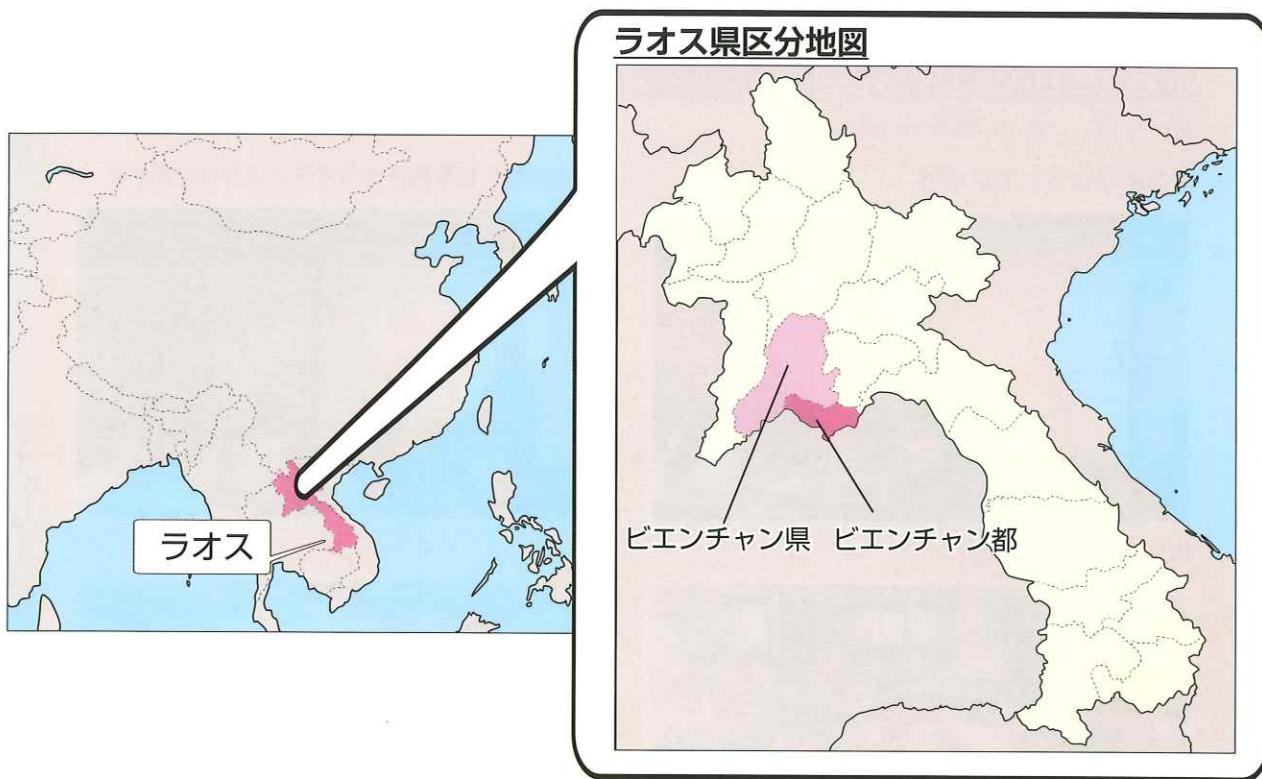
■ 同行者

		名 前	性別	備 考
1	団 長	いな 稲 富 郁 夫	男	公益財団法人鹿児島県国際交流協会 総務企画課長
2	調 整	さか 坂 もと 本 わたる 渉	男	青年海外協力隊ラオス〇Ｂ（電子機器）
3	健康管理	おお 大 坪 ま み	女	青年海外協力隊ラオス OG（看護師）
4	調 整	ご 後 藤 まどか	女	青年海外協力隊フィリピン OG（観光）
5	記 錄	にし 西 悠 宇	男	南日本新聞報道部 記者
6	記 錄	にし 西 ももか 萌々佳	女	株式会社鹿児島放送 報道情報センター 記者

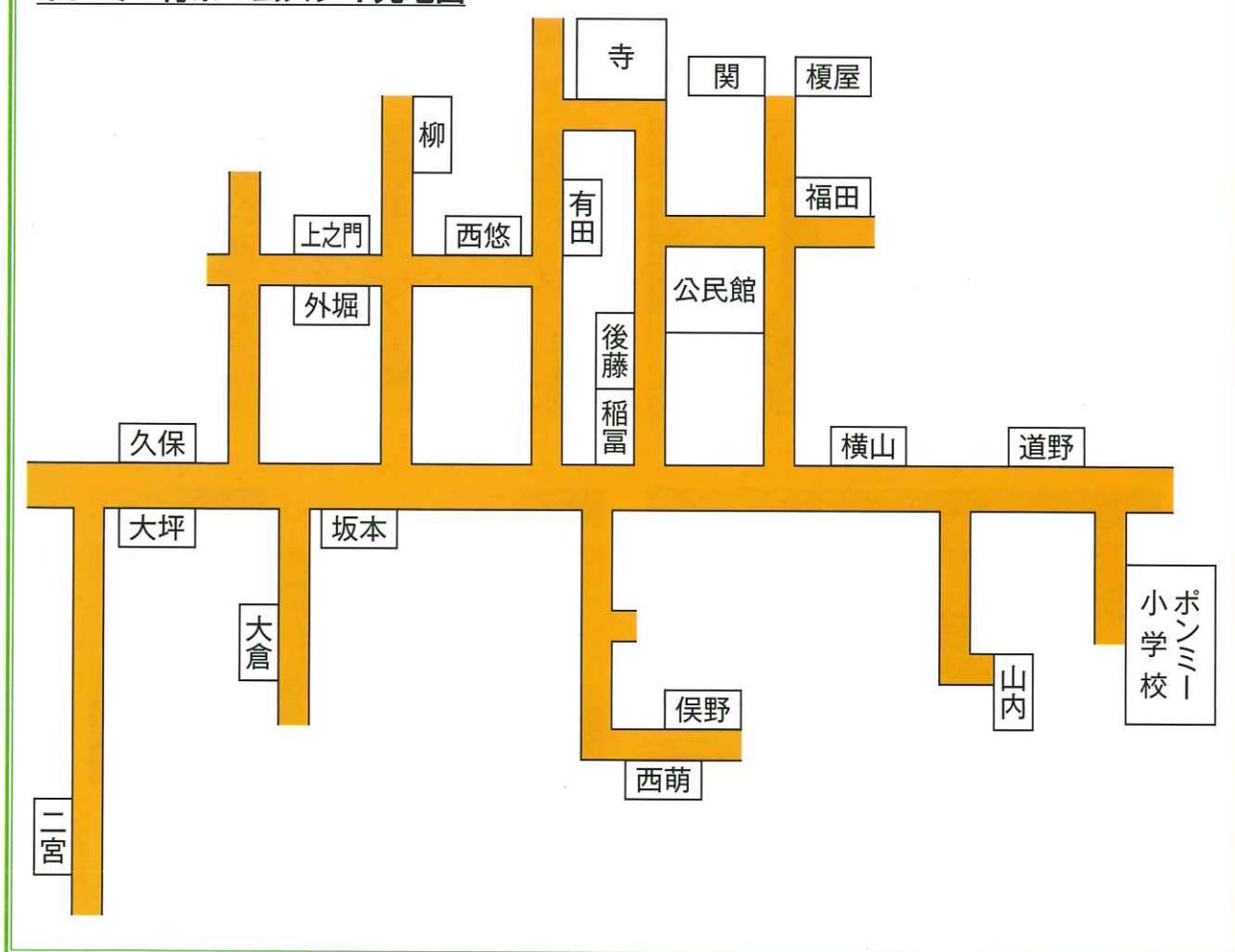
スケジュール

月 日	曜	地 名	時 刻	交通機関	内 容	宿 泊
7月 24日	日	鹿児島中央駅 鹿児島中央駅発 博多駅 福岡空港発 バンコク (スワンナプーム国際空港) ビエンチャン (ワットティ国際空港)	6:00 6:57 発 8:41 着 11:35 発 14:55 着 19:35 発 20:45 着	さくら 542 タクシー TG649 TG574 バス	集合・結団式 福岡空港へ移動 チェックイン ホテルへ移動	
7月 25日	月	ビエンチャン ポンミー村	11:00 14:00 ~	バス バス	ホームステイ先へ移動 入村式	ホームステイ
7月 26日	火	ポンミー村 ビエンチャン都 パークグム郡 ポンミー村	8:30 9:30 ~ 11:30	バス	出発 青年海外協力隊員活動視察 【助産師 高木 とも子隊員】 場所：パークグム郡病院 午後：ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月 27日	水	ポンミー村	8:30 10:00 ~ 12:00	バス	出発 青年海外協力隊員活動視察 【日本語教育 立尾 論世隊員】 場所：ラオス青年同盟	ホームステイ
7月 28日	木	ポンミー村	8:00 ~ 12:00 12:00 ~ 15:00 15:00 ~		学校交流 場所：ポンミー小学校 バーシー・お別れ会 ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月 29日	金	ポンミー村 ビエンチャン	8:30 13:30 ~ 15:00 16:00 ~ 17:00 18:00 ~ 19:00	バス	午前：村とのお別れ JICA ラオス事務所 表敬 ナイトマーケット視察 ラオス伝統舞踊ショー見学 場所：クア・ラーオ レストラン	ホテル
7月 30日	土	ビエンチャン ビエンチャン (ワットティ国際空港) バンコク (スワンナプーム国際空港)	9:00 ~ 21:30 発 22:35 着	バス TG575	ビエンチャン視察（周辺観光） 友好橋、ブッタパーク タートルアン、パトゥーサイ 空港へ移動	機内泊
7月 31日	日	バンコク (スワンナプーム国際空港) 福岡空港着 鹿児島着	0:50 発 8:00 着 14:00 着	TG648 バス	解団式（県民交流センター）	

地図



ポンミー村ホームステイ先地図



体験事業ドキュメント（総集編）

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

6月12日(土),7月2日(土)～7月3日(日)

第1回・第2回事前研修

体験事業についての説明



【文化講座】青年海外協力隊ラオスROB坂本さん



語学講座（ラオス語）



【体験談】青年海外協力隊ラオスROG 大坪さん



現地での出し物の練習



ラオスについて調べたことの発表



(研修を終えて)ラオス語やラオスの歌を教えてもらい、ラオスに行く実感がわいてきました。

榎屋 夢

7月24日(日)

結団式・出発



機内では、ほとんど英語で、
海外にいる感じでした。ラオス
で楽しく交流し、今まで経験し
たことのない境遇を思いつき
り体験したいと思います。

俣野 稲介



ラオス到着



(ラオス到着後), ホテルに移動の際、町中を走
ると、屋台やノーヘルメットでバイクを運転する
人などを見て日本にはない雰囲気に新鮮さを感
じました。

有田 真衣

7月25日(月)

ポンミー村 入村式



7月25日(月)
ホストファミリーとの対面



7月26日(火)

午前：青年海外協力隊活動現場視察（高木 とも子 隊員・助産師）

バクグム郡病院





院内には日本から送られてた血液を分解する機械があり、それを使いこなせていたので良いことだと思いました。また、ポスターにはポリオにかかった子どもの写真が載っていて、将来はあの子たちをどうにかしてでも助けたいと思いました。

横山 真由凜



日本の衛生（状態）を当たり前だと思っていたけど、それは世界でも特別なんだと思いました。
高木さんはかっこよく、人間的に素晴らしいかったです。
ラオスに今ある良いことをよりよくしていく活動がすごいと思いました。

二宮 花音

7月27日(水) 早朝 寄進(きしん)



7月27日(木)

午前：青年海外協力隊活動現場視察（立尾 論世 隊員・日本語教育）

ラオス青年同盟



論世さんが、日本語の先生として、活動している様子を見て、すごく刺激を受けました。周りも明るくなるような人で、(私の)憧れの人となりました。話をしているだけで、元気をもらいました。

道野 はるか



ラオスの人は学ぶ意欲や吸収する力を日本人以上に持っていると思います。普通の日本の学校の生徒とは聞く時の態度が違い、すごくキラキラしていました。

関 文子



7月28日(木)

午前：ポンミー小学校での交流会



建物を見たけれど、扇風機もクーラーもなくて、イスも机も木だし過ごしやすいのかな!?と思いました。学校交流では何より子ども達が楽しんでくれて、たくさん笑ってくれたことが本当に嬉しかったです。小さい子ども達と交流が出来て良かったです。どの国の人達もキラキラしています。

大倉 魁生



ホームステイの様子



言語は多少分からなくて、ジエスチャーなどでだいたい通じることは分かったものの、言語の大切さを学びました。また、人とのつながりの大切さも学びました。

上之門 優里

7月28日(木)
昼：ホストファミリーとのお別れ会



夕方：ポンミー村周辺観光



シン（民族衣装）を着て、バーサーという別れの儀式をしました。みんな手首にひもを巻き付けてもらって無事に日本に帰れるようにしてくれました。村の人たちがたくさん私たちの為に集まってくれて「愛」を感じました。

山内 麻未

7月29日(金)

午前：ホストファミリーとのお別れ



最初は帰りたいと思っていたけれど、自分でも気付かないくらいラオスを好きになっていました。何も知らない日本人の私をあたたかく迎え入れてくれて、いつでも気をつかってくれました。ホストファミリーとの別れは人生で最も辛かったです。

外堀 真那

午後：ラオス JICA 事務所 訪問



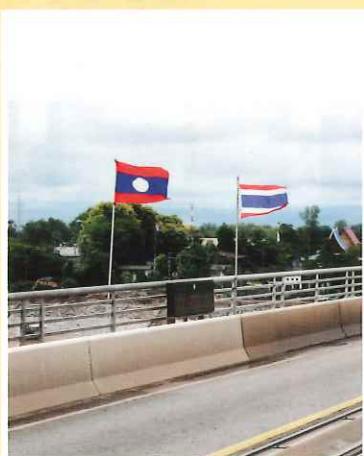
夕方：ナイトマーケット視察



夜：クア・ラーオレストラン



7月30日(土)
ビエンチャン周辺観光



ラオス出国



7月31日(日)

帰国・解団式



日本に着くと、(すぐに)ポンミー村に戻りたいと思いました。みんなに人を大切にしてくれると思っていなくて、涙が出るほど、ポンミー村が恋しくなりました。会いに行きたいです。

福田 楓歩

8月3日(水)～10日(水)

表敬訪問



支えてくれたたくさんの方々のおかげで、私たちは無事に行き、帰ってくることが出来ました。いっぱい成長できる機会をいただけて、とてもうれしかったです。本当にありがとうございます。

久保 日向子

8月20日(土)

報告会



この事業を終えた今、私は多くの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

この事業を計画して何年にもわたって続いている関係者の方々、同行者の方、マスコミの方々の支えがあったからこそ、今回の事業が成功したと思っています。感謝の気持ちを忘れず、日々精進したいです。

柳 ひな子

団員が感じたこと

幸せ

鹿児島純心女子高等学校 1年

関 文子

例えば日本人千人とラオス人千人に対して、「あなたが1番幸せを感じる瞬間」を聞いたとする。きっと日本人の過半数は自らの趣味に没頭する時間を答え、残り10%ぐらいが家族と過ごす時間と答えるであろう。だが私がホームステイで出会った人々は皆幸せを感じる瞬間を「誰かと共にご飯を食べる時間」と答えた。その誰かは人によって様々だが家族、友達、子ども達などと自分の身近にいる人を大切に思っている。ささいなことではあるが私はここに異文化を感じた。

私のクラスには国際理解という授業がある。これは私の所属するコースならではだがその授業の一貫に英語キャンプというものがある。名前の通り英語だけしか使ってはいけないキャンプなのだ。そしてそのキャンプにはそれぞれ遠く離れた国から十人のゲストが来る。その十人の中には毎年アメリカやイギリス、カナダ、フランス。このような留学の王道であったり、一方日本でポピュラーな国からは一人も入れないことにになっている。このキャンプが求めるのは、そう、私達が全く聞いたこともない国のほとんどが発展途上国なのだがそれらの国々の人と交流することなのだ。そこには知らないだけで興味をひかれる異文化も日本と何ら変わりのない文化もあった。ただ一つだけ必ず異文化を感じられるものがあった。それは冒頭と同じく「幸せを感じる瞬間」だったのだ。

人には必ず幸せを感じる瞬間がある。それは人によって異なればそれが自分以外の誰かにとっては全く幸せでも何でもないことだってほとんどだ。ただそれだけ個性がでる。なんとなく一つ課題を決めなければいけないときに思いついたこの課題がこんなにも私に文化の違いを教えてくれるとは思ってもいなかった。私がとった十人の学生の幸せとラオスと人々の幸せを見て気づいたことがある。誰かと共に何かをする時に幸せを感じると答えた人が多かったのは所謂発展途上国と呼ばれる国だったのだ。実は質問する前から私は予想でなんとなくそういうのではと言っていた。ただそ

の理由は分からずなぜなのかと書かれた用紙は白紙のままだった。だがラオスに行って村の人々と生活を共にしてから私はどうしてそのような発展途上と呼ばれる国々の人は誰かと共に過ごすことに幸せを感じるのか分かったのだ。

彼らにはまだルールが少ないのだ。ルールといつても法律だけでなく、日本人の暗黙のルールなどさまざまだ。例えば日本には人の家にお世話になるのは気を使わせるので迷惑になるから必要最低限にしようという暗黙のルールがある。でもそれはそれらの国にはない。それぞれの人々が自由に行きかい、ご飯を食べたり楽しく談笑をする。行く人も来る人もそれを当たり前だと思っている。それは昔の日本にもあったはず。

私達はいつからたくさんルールに縛られるようになったのだろう。もっと自由な気持ちになれば人と過ごす楽しさが分かるのではないだろうか。発展と共に失った人と人の気がねなく過ごせる時間。その時間の大切さと幸せが感じられ彼らのほうがよっぽど人として発展している。



お風呂



学校交流にて 本人：右

団員が感じたこと

ラオスに必要な支援とは

吉野中学校 3年 俣野 稜介

私が最も印象に残った光景は車やバイクの部品、テレビのアンテナなどが、道端に捨てられていたことである。ラオスでは埋め立てがゴミ処理の方法だがその技術や人手などが追いついていない。日本や先進国がよかれと思って輸出した技術や商品は仕組みや使用方法が理解できず結局ただのゴミになっている。JICA事務局で教えていただいた話だが医療関係の機具がすでに宝の持ちぐされ状態だそうだ。日本では焼却やりサイクルといった処理法があるがラオスは金銭的にその技術をとり入れていないという現状もある。

私のホームステイ先には、16歳の兄がいた。彼は田植えやはた織りといった家の仕事を手伝いながら学校に通っている。一方で授業料が払えなくなり学校を辞める子供も少なくない。しかし、学校に通っている兄の英語の宿題を見ると、ラオス語ばかりで実際に身につくようなものばかりではなく、中学生の私に手伝ってと言った。田舎の小さな村では学校教育が不十分なものである。日本の学校も文法ばかりで実践的な英語スピーチ能力は低いといわれているが比べものにはならない。

この研修の中で青年海外協力隊の方を訪ねた。最初に助産師として働く方の現場を見た。その中で助産院では確実に子供が生まれるが、ラオスの現状としては「千人中68人の出生児が亡くなる」という話を聞いた。とてもショックだった。ラオスの未来を担うはずの子が生まれ育った環境のせいで亡くなってしまうのだから。翌日日本語教師の働くところに行った。そこで隊員の立尾さんに「日本語を教わった学生が日本に来て技術を学び祖国でそれを伝えられるように日本語を教えている」と教わり、この生徒たちが助産院で生

まれた子に日本で学んだ教育方法を通して国を新しく作っていくいしづえになるのだと思った。

おわりに発展途上国の支援のあり方として本当に必要なことは技術だけではなくそれを運用する「環境」そして「人作り」が欠かせないということだ。

私はこの研修を通じて日本では知ることのできないラオスという国の現状や課題を見出せた。今後私自身どんな道に進むか分からぬがこの経験が一生の宝物であり財産になったと思う。

この様な機会を与えて下さった皆様と家族へ感謝しています。



セパタクローで遊ぶ 本人：中央



別れの時

本当の援助とは

鹿児島大学教育学部附属中学校 1年

横山 真由凜

近年、目覚ましい経済成長を遂げているラオス。内陸国というハンデを抱え、「東南アジアの最貧国」とも称されるラオスだが、過去10年間の実質GDP成長率は7~8%で推移するなど、成長率は東南アジアの中でもトップクラスだ。この急成長の裏には、青年海外協力隊の方々の長年による支援活動があった。今回、この事業への参加を経て、私の支援活動に対する見方は180度変わることになった。

「援助を受けて、嫌悪の一かけらさえも感じる人はいないはずだ。援助は、正しいこと。」恥ずかしながら、ラオス訪問前、私が考えていたことだった。もちろん、島国育ちの私にとって、海を越えた異国での援助活動なんて、そんな真摯にとらえるようなことではなかったこともある。だが、情報社会のこの世の中、メディアのみを通じ、「援助を受けて喜ばない人なんていない」と必然的に受け取っていたのは確かだ。

青年海外協力隊で日本語教師として御活躍されている立尾論世さんの活動を見学させていただいたときだった。「豊かさを求めるところには援助も必要かもしれない。でもその地のひとに何が必要か、それを見極めるのは時にとても難しいし、不必要的ものを過剰に与えることは却って悪化を招くかもしれない。与えているようで尊厳やその地の環境を踏みにじっていたりね。」衝撃的だった。今まで必然的に私の中に存在していた「常識」にとらわれず、常に相手の幸福を考えながら活動を行うという新たな視点で考えることができるようになった。つまり、「援助は豊かにするためのものではなく、幸せにするためにあるもの」という考え方を持つようになった。

そして、ラオスの人の温かさにも触れることができた。ホームステイでの出来事だ。ホームステイ初日、見知らぬ人とラオス語の環境の中、半日過ごすというのは、正直苦痛だった。言いたいことが伝わらず、何度もあきらめようとした。しかし、どんなに失敗しても、ホストマザーは「ボーペンニヤン(大丈夫)」と

言って、自分の時間を割いてまで懸命に私とコミュニケーションを図ろうしてくれた。ラオス人にとって日々の生活に幸せを感じられる一番のキーワードこそ「ボーペンニヤン」ではないだろうか。ホストファミリーはみんなこれが口ぐせ。いつでも穏やかに、緩やかにという気持ちの表れだと思う。ホームステイでは、鳥の顔とカエルの料理がてきてとてもおどろいた。カエルは予想以上においしかった。ホームステイ5日目。村の人々が私たちのためにバーシーという儀式を開いてくださった。手首には何重もの白い糸を巻いてもらい、ラオス人の一員になったような気がした。最後はラオス人が好きなダンスで幕を閉じた。どんなに遠くとも、言葉が通じなくとも、心と心はどこへ行っても通じあっていることを実感した。ホームステイ最終日、お世話になったポンミー村をなかなか去ることができなかった。村が一体となって迎え入れ、親切にしていただいた。いつか、恩返しをしようと心に誓い、バスはポンミー村を去った。

今回の研修を通して、「規律、時間を守る」という日本人の良いところを改めて実感することができた。そして、将来も、ラオスのような途上国で、日本なら救える命を救うため、小児科医としてUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の職員になりたいと思う。もちろん、青年海外協力隊にも参加したいと思う。

最後に、今回の事業を企画賛同して下さった皆様、お忙しい中をご奔走いただきまして、心より感謝しております。

そして、団員の皆様、同行者の皆様、ひとかたなるお世話、お骨折りをいただき、身にしみてありがとうございました。本当に、ありがとうございました。



ホストファミリーと 本人：中央

団員が感じたこと

すばらしい経験

鹿屋中学校 1年 福田 楓歩

私がラオスに行って、楽しかった事や、出来るようになったこと、そして自分自身の変化など、たくさん思い出ができました。

まずは、楽しかったことは3つあります。一つ目は、ホームステイです。最初は、何もできなくてただすわったままだったけど、だんだんと会話ができたり、いっしょにご飯をつくったりして、とても楽しかったです。

二つ目は、みんなでショッピングモールや、市場などに行って値下げをしたことです。だんだんと値段を下げていくとお店の人が嫌そうな顔をしたりしたけど、日本ではできないことなので、できてうれしかったです。

三つ目は、小学校へ訪問したことです。ものすごくかわいい子供達がたくさんいて、みんなずっとかわいいかわいいといっていました。小学校の子供達へ私達から、ダンスや書道をひろうして、みんなから拍手をもらったりしてとても楽しかったです。

次は、私ができるようになったことが一つあります。それは、あおぞらトイレです。私がホームステイした家は、少しラオスらしい家でした。そこでトイレに行ったら、トイレットペーパーを忘れたことに気づいて、大声で呼ぶこともできなかったので、ラオス人のように、水でペッペッとしたら、意外になれてしまいました。家では、どこに行ってもできそうな感じがします。

そして、私、自分自身の変化がありました。それは、私は養護学校の先生になりたいとずっと思っていました。でも、今回、ラオスというすばらしい国に行かしてもらい、そこで色々な体験を行って、気付いたことが、私は、JICA事務所に入って、貧しい国の子供達に、将来大人になっても後悔しないような勉強を教えられる教師になりたいです。今、たくさんの国で争い

が起こっており、支援に行けない国があると思います。私はそういう国を、子供達からいい国につくってほしいので、将来JICA事務所に入って、そして少し力になれるようにがんばりたいと思っています。

最後にラオスへ行って帰国するまでに言われた言葉があります。それは、「現地人」です。うれしいような、うれしくないような気持ちでした。私はラオス人のような感じで、一週間がんばろうと思っていたが、がんばらなくてもよかったです。あと、日本語教師のところに訪問したとき、生徒さんから言われた言葉は、「ラオス人?」でした。そして、日本人と答えるとものすごくびっくりしていました。ラオスからタイに行くときに、パスポートと顔の確認があったときに、2人のラオス人男性にものすごく笑われました。たぶんそれは、私が現地人と思っていたからだと思います。

明日からカンボジアへ行きます。また、カンボジア人ぽく、一週間を過ごしたいです。



ポンミー村お別れ会 本人：左



ホストファミリー

訪れて初めて知ったこと

川辺高等学校 2年 道野 はるか

「え。これがお風呂？」

私が、ラオスのホームステイ先で最初に思ったことです。おけに水がくまれてあり、洗面器でその水をすくい、髪の毛を洗いました。日本のお風呂でお湯を使って体を洗えることは、なんて恵まれたことなのだろうと思い、私はラオスと日本の生活の差に驚きました。しかし、トイレもお風呂も慣れてくると何も「汚い。」とか「くさい。」とか、感じなくなりラオスの人と同じような生活を送ることができました。ラオス人の生活を外国人が見るとおそらく、「貧しい。」だと、「生活が苦しそう。」とか、言う人がたくさんいると思います。しかし、私はホストファミリーと一緒に生活しながら感じた事があります。それは、ラオスの人々は、なにげない暮らしに、幸せを感じているということです。私は、ラオスに滞在中、家族全員で丸くなってご飯を食べたり、話をしたりすることに、とても温かさを感じました。日本にはない、人のおおらかさがあって、日本にいるより過ごしやすかったです。また、私がホームステイをした村は、道路整備の支援がいきとどいていないため赤土でしたが、その分、アスファルトのジメジメ感が無くて日本みたいなしつこい暑はありませんでした。私はラオスに行く前、ラオスに対して「不便」「貧しい国」という勝手なイメージしかもっていませんでした。しかし、思っていた以上に、生活しやすく、ラオスに来た人が必ずなると言われている「ラオス病。」になった気がしました。

いまの日本はどうでしょう。物があふれるほどあり、何でも手に入るのがあたりまえになってきているような気がします。ラオスで8日間過ごしたからこそ、気づいたことがたくさんありました。私がラオスで生活する中で一番嬉しかったことは、ラオスの人々とラオス語を使ってコミュニケーションをとったことです。ラオスは英語を話せる人がわずかしかおらず、ホームステイの1日目は、ほとんど話をすことができませんでした。しかし、2日目からは、指さし会話帳を使

いながら、日本の文化を紹介したり、ラオスにはない海について写真を見せながら話をしたりして、会話ができる喜びを感じました。また、私は、日本のお土産として、私の両親と祖父母が作っているお茶を持っていきました。ラオスの食べ物は辛いか甘いか極端なので、ほんのりにがい日本茶をおいしいといって飲んでくれるか不安でした。しかし、一口飲んだあと、「セーブラーイ(とてもおいしい)」と言ってくれました。その日から毎朝ご飯の時にお茶がでてきたので、持つていってよかったなと思いました。

ホストファミリーには、とてもよくしてもらい、夕方にドライブへ連れていってくれました。その時に見た夕やけが今までに見たことないくらいきれいで、赤土の匂いと一緒に吹いてくる風を、体いっぱいに感じました。こんな体験ができたのも、発展途上国ならではだと思います。

ラオスは、いろいろな国の支援によってどんどん成長しています。支援が加わり、ラオスがどんどん発展していくのは、いいことですが、いまあるラオス人のおおらかさや温かさがなくなってしまうのではないかなど少し思います。私がこれまで思っていた支援のイメージが、今回の派遣でだいぶ変わりました。



ポンミー小学校にて 本人：右



寺院の前で

団員が感じたこと

援助することの難しさ

加治木高等学校 3年 二宮 花音

これが私がこの8日間で学んだことです。みなさんはラオスという国を知っていますか？ラオスは中国、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、そしてタイという5つの国に囲まれた東南アジア唯一の内陸国です。しかし未だに電気が通っていない村も数多くあるなどアジアでも有数の発展が遅れている国でもあります。そのため日本、中国を始め多くの国がラオスを支援していますが、ラオスに滞在した8日間を通じて私は支援することが本当に良いことなのかと深く考えさせられました。

先進国が開発途上国を支援することは当たり前のことはないか、ラオスに行く前私はそう思っていました。しかし青年海外協力隊として働いている方にある話を伺いしてそのことについて疑問を持つようになりました。青年海外協力隊としてラオスの公務員に日本語を教えている方が自分の生徒にもし〇〇がなかつたらどうする？と尋ねたそうです。するとその生徒は△△の国にもらえばいいと答えたそうです。開発途上国だからと言って私達が何から何まで援助していると、その国の人々が援助されることに慣れてしまって自分で何かしらの努力をして物事を得るという発想がなくなってしまうという援助ゆえに起こる問題を知り、私は援助することが本当に良いことなのかと疑問を持つようになりました。

もう一つ私がラオスで感じた事があります。それは発展することがその国の人々にとって本当に幸せなことなのかということです。

ラオスは幸せの国だとよく言われますが実際にラオスに行って本当に幸せの国だと感じました。人々はみんな温かくほんの少し前には知らなかった人と今は一緒にご飯を食べているということもしばしばあります。子育ても近所の子どもは自分の子供というように地域全体で子育てをしていて、レストランなどで赤ちゃんが泣きわめいたらその店の店員がなだめてくれるそうです。逆に日本だったら自分の隣に住んでいる人の顔

も知らないし、ましては話したこともない。赤ちゃんが公共の場で泣きわめいたら嫌な顔をされ肩身の狭い思いをする。ラオスが発展するとしても日本のようになるくらいなら私はラオスに発展せずに今のままでいてほしいと思います。裕福でないからこそ身近な幸せが分かり人々も温かい。ラオスには物をたくさん持っている人は持っていない人に分け与えるという習慣がありそれゆえ国の貧しさの割には物乞いが少ないと言われています。ラオスの人々が持っている温かさを日本人がもともと持っていたいかったとは私は思いません。ただ、日本という国が発展していく中で忘れてきた大切なことをラオスの人々はまだ持っていて、それを大切にしていきながら発展してほしいと私は思います。ラオスは幸せの国ですが経済状況、衛生面などまだ課題はたくさんあります。その国に住んでいる人々がより幸せになれるような発展を手助けしたい、この事業を通じてそう強く思うようになりました。



ホストファミリーと 本人：右から2番目



托鉢の様子

支援とは？

鹿児島第一高等学校 1年 山内 麻未

「支援」という言葉を聞くと、私は先進国が発展途上国を上から目線で見ているようなイメージがあって、あまり好きな言葉ではなかった。しかし、青年海外協力隊や国際協力には興味があり、今回見学に行けることを楽しみにしていた。

協力隊員の方々は、ラオスという日本とは文化も生活習慣も違う国に生活しているのにもかかわらず、明るい笑顔で活動されていることが印象的だった。助産師の隊員の方の病院では、診療室やオペ室を見学させてもらったが、決して清潔ではなく、土足で中に入る虫も出そうな部屋であった。また、フランスの援助によって建てられた建物にはスロープがあった。私はラオスへ行く前、簡単なラオス語や文化を知るために、ラオスの子ども番組を見ていた。するとその中に、車いすの子どもが普通の子どもたちと元気に遊んでいるアニメがあった。日本では小さい子どもが見るアニメでは障害者が出ることはあまりないので、障害者に対してどのような意識があるのか質問することができた。すると、「ラオスは障害者の方などに対して、日本ではありがちの偏見や差別というものがなく、ありのままのその人を受け入れる文化がある」、ということを教えてくださりとてもいいことだなあと思った。そのかわり、みんな平等な人間という意識から、バリアフリーの考え方がないことも知った。

私はずっと知りたかった「支援」という言葉の意味を隊員に聞くことができた。すると、「一方的に『何をどうすればもっと良くなる』などというのではなく、現地の看護師と同じ立場になり、一緒に仕事をしその中で自分のもっている知識や経験を生かしながら、こうしてみよう、ああしてみようと声をかけてすることだ」と教えてくださった。私は支援という言葉が、お金をあげたり、何かを造ったり、一方的に何かをするというイメージが強かったので、今回実際に活動されている隊員から現地でお話しを伺えたことで納得することができた。

ラオスは貧しい国とされているが町の中で物乞いをしている人がいない。ラオス人は物のない人に物を与えるという精神があり、物乞いの状態になるまえに親戚や村の人々が助けてあげるらしい。日本では薄れてきている思いやりのあるすばらしい文化だと思った。しかしその反面、ラオス人はこのような精神を持っているので、外国が支援や援助をするとそれにとても頼ってしまうらしく、私たちが支援や援助をしている理由を理解してもらう必要があるということも感じた。また、その意味を伝えることも協力隊員の活動の一つであると知った。

今回ラオスへ行くことができたおかげで、「支援」という言葉のたくさんの意味を知ることができた。また青年海外協力隊については、本で読んだり、テレビで見たりして多くのことを知っているつもりであったが、実際に現地へ行き話をきくとまだまだ知らないことや誤解していることがたくさんあった。私はまだ将来なりたい職業が決まっていないが、この経験が一つの材料になると感じた。

最後に今回この事業を企画して下さった方々、同行者の方々、団員のみんな、本当にありがとうございました。コップチャイ ライライ！！！



パークグム郡病院にて 本人：右から2番目



ナムグム湖にて 本人：左

団員が感じたこと

私とラオス

加世田高等学校 1年 大倉 憇生

最大の宝はドーレと出逢えたこと。ドーレは私のホストシスター。ポンミー村に到着した日、外国人を一人で迎えにきて自宅に連れて帰った。共働きの両親に代わり十四歳のドーレは、この大役を立派に果たした。ドーレとの出逢いから一週間、自分自身を、日本を振り返る旅が始まる。

私の夢は、発展途上国における都市部と農村部の格差を無くすこと。出発前私は、これから行くラオスという国では何が不足しているのだろう、帰国後どのように物資支援をしていくかと思っていた。しかし、視察先の病院で、日本が現地の病院にワクチンを冷やすための冷蔵庫を支援したが、使い方、修理の仕方が分からず、結局物置になってしまったことを知る。物資援助にとどまらず、現地の人の自立を支援する必要があると感じた。

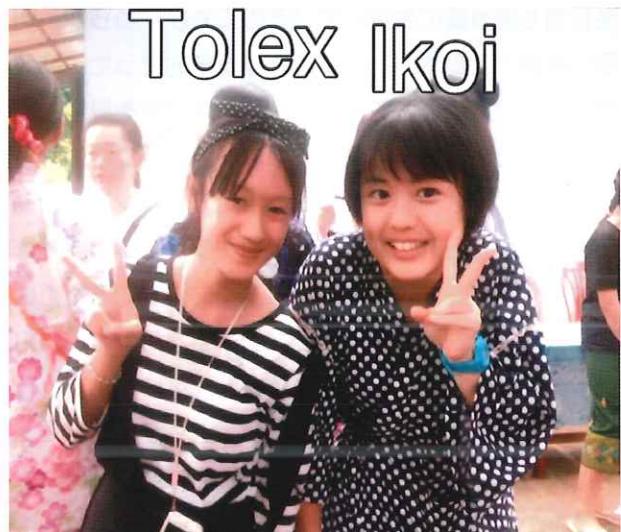
また、ラオスの夜はクーラーが必要ない。その涼しさの理由の一つとして、舗装されていない赤土の道路を考えられる。その赤土の道路が日本のようにコンクリートで埋めつくされたら、利便性が高くなる一方、心地良かったラオスの夜は失われてしまうかもしれない。ラオスらしさを失うような援助はしたくない。先進国と同じように発展されることが援助だろうか？途上国の良さを残しつつ、その国の人たちが住みやすく誇れる国と一緒に作り上げたい。

帰国後、ラオス滞在中の一週間分の新聞を読み返してみると、日本では障害者施設の大量殺人事件、ポケモンGOの大流行がトップニュースとなっていた。ポンミー村のホストファミリーの家は、びっくりするような簡易的な鍵で施錠されていた。日本のトイレの鍵のほうがよほど頑丈である。でも、村の治安は良く、強盗、殺人などの凶悪犯罪はないらしい。私と同世代の子どもたちのスマートフォン所持率はほぼ100%。でも、コミュニケーションツールとして利用しており、ゲームに没頭することはなかった。日本人は物質的豊かさと引き換えに、心の豊かさを失っているのではな

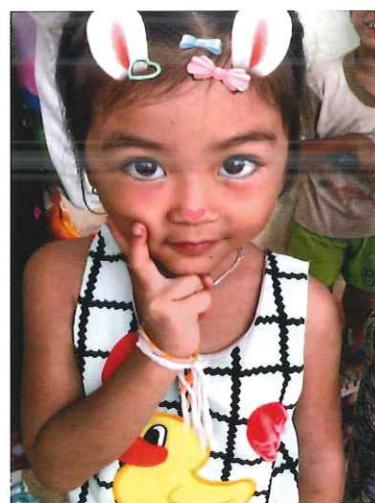
いか。生きるうえでのたくましさ、タフさ、心の豊かさは、ラオス人の心を見習いたい。今の生活が当たり前になり、気づかぬうちに発展しすぎて、失ってしまったものはたくさんあるのかもしれない。

現地の小学校訪問の際、ある一人の少女に出逢った。その少女のきれいにすんだ大きな瞳に引き込まれた。この瞳に映るラオスを壊してはいけない。

一週間のラオス滞在で、自分を振り返り、日本を振り返り、途上国に対する考えが180度変わった。この貴重な経験を糧に、夢実現に向かいたい。



ホストシスターのドーレ：本人右



ポンミー小学校で出会った6歳の女の子

実際に見た海外

川辺高等学校 3年 有田 真衣

まず始めに、この事業を支えてくださっているすべての関係者の皆様に心から感謝申し上げます。そして、研修から共に学んできた同じ団員のみんなにも感謝しています。私にとって本当に貴重な7泊8日になりました。

初めてのホームステイは、とまどうことばかりでした。研修で学んできたラオス語もほとんど通じず、言語が違うだけでコミュニケーションをとることがこれほど難しいのかということを身をもって体験できました。最初にホームステイ先に行ったときは、どうすれば良いのかなにをすればよいか分からず部屋にこもってしまいました。しかし、ホストファミリーや近所の方々が市場や川に連れだしてくれて、積極的にコミュニケーションをとろうしてくれました。ラオスの子ども達の学ぶ姿勢と積極性に驚きました。私が話す日本語を真似したり、紙にメモをとったり、楽しみながら学ぶ姿勢に、自分の勉強に対する姿勢を省みました。そして、言語の大切さを改めて実感しました。

ラオスでは、ほんとうに驚きの連続でした。先入観をもっていた自分が恥ずかしくなりました。開発途上国は、不衛生で汚くて、不便な暮らしなのだろうと思い込んでいました。しかし、実際はテレビや冷蔵庫、冷房も完備していました。なにより、スマートフォンまでも普及していました。東南アジアで一番貧しい国と聞いていたけれど、開発途上国もここまで発展しているということを現地に行って分かりました。ラオスの生活では、ほとんど不便なところはなかったけれど、お風呂、トイレは慣れるのに少し時間がかかりました。日本は、温かいシャワーが出るのは当たり前、トイレも洋式でビデがついていて……。そんな、あたりまえがラオスでは通じませんでした。お湯は出ないし、トイレは自分で流さなければならないし……。日本が、どれだけ恵まれているのか分かりました。そして、便利すぎる生活に埋もれている自分に対して少し嫌悪

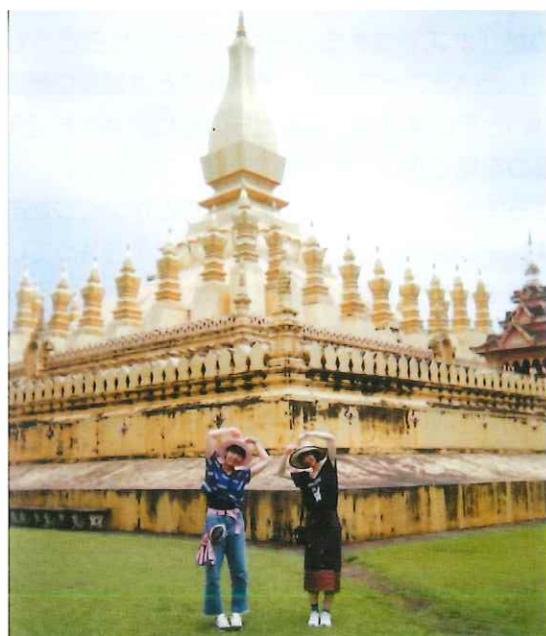
感も感じました。日本は、必要以上の便利さを追求しそぎているのではないかと思うようになりました。

ラオスでは、昔の日本の姿を見ているように感じました。家族や地域の繋がり、昔ながらの行事を大切に受け継いでいること、限られたものを大切にする心。これから、ラオスは急速に発展を遂げていくと思います。しかし、発展していくなか今ある大切な心遣いや、文化、習慣を失わないか心配です。

この事業に参加しなければ、私は開発途上国と向き合うこともなかったと思うし、海外に出る勇気も出なかったと思います。本当に大切な時間になりました。この経験を将来活かしていきたいです。



ホストファミリー・団員と一緒に 本人：右から2番目



タートルアンにて 本人：左

団員が感じたこと

海外研修

川辺高等学校 3年 上之門 優里

「乗りかかった船にはためらわずに乗ってしまえ。」という名言があります。この言葉の通り、迷つたらとりあえず何でもやってみるのが私のポリシーで、今回も例に違わず挑戦しました。初の海外がラオスで本当に良かったと思っています。開発途上国を訪るのは滅多に出来ないので、またそこで実際活躍する協力隊の活動を間近で見ることはもっと難しいと思うのでこの研修に参加して本当に良かったです。今回、このような素晴らしい研修に参加させていただき本当にありがとうございました。

私の開発途上国のイメージは「貧しい」「なんにもない」「情報伝達が遅い、また手段が少ない」でした。しかし現地に行って自分の無知さとそれこそ私が持つ情報の古さを思い知ることになります。何故なら想像していたよりも大きな発展をしていて首都は道路もきちんと整備され、立派な建物が立ち並んでいたからです。洋風でおしゃれな建物も多く、「本当に開発途上国？」と疑いたくなるほどでした。しかし、やはり首都から少しはずれると赤土の道になりました。時折、バスがゴトン！と大きく揺れるのがアトラクションみたいで楽しかったです。

7泊8日の研修の中で一番印象に残っているのはホームステイです。村に着くと、まず私が不安になったのが「ホストファミリーがいなからどうしよう。」ということでした。そんなことは滅多に起こり得ないと思いますが、団員たちの元に次々とお迎えがくるのを見てすごく焦ったのを覚えています。

さらにホームステイ中、驚いたことがいくつかあります。一つは子どもたちが普通にスマホを持っていました。文明機器はあまり普及していないだろうと思っていたので本当に驚きました。LINEやTwitterなどをしていて日本とそんなに変わらないんだなと感じました。次に家の設備が思ったよりも整っていることに驚きました。私のホストファミリーの家はそこそこ裕福だったらしく、冷房完備、お風呂はシャワーでトイレも水洗。しかもトイレとお風呂に限っては4つずつありました。良い意味で「日本の家より豪華やん！」と心から叫びたくなりました。

ホストファミリーはとても温かい人たちでした。毎

日送り迎えをしてくれたり、マーケットにつれて行ってくれたり本当にお世話になりました。近所の人同士も大変仲が良く、ホームステイ最終日もお向かいさんの家と共に鍋料理をしました。ホームステイの4日間は大変充実した心温まるものになりました。別前の前日、バーシーと呼ばれる祭りを行い、村の人々とどんちゃん騒ぎをして歌い、踊りました。言語や文化の壁を越えて心が繋がったような気がしてとても嬉しかったです。

協力隊の活動視察では、より支援に対する興味が高まりました。活き活きとした顔で楽しそうに活動する姿を見て、私は「人を助ける」という意思よりも「やりたくてしていることが支援につながっている」という印象を受けました。何故なら他人へ善意だけでは長く続かないと思うからです。支援することは賛否両論ですが、私は世界中の多くの人たちが相手を思いやり、共存する術を探すきっかけになるのではないかと思います。私はこのことを隊員の方の話から得て、私も将来協力隊の一員として世界に貢献したいと思いました。今回たくさんもらった分、今度は私がラオスに多くを残していきたいです。



ホストファミリーと 本人：右から2番目



ポンミー村の風景

大きな愛

神村学園中等部 3年 外堀 真那

タイの空港に降りたった時、私は「初めての海外に来たんだ」という緊張と興奮で胸がいっぱいだった。日本語が何一つない環境で全ての物がキラキラして新鮮に映った。そして、ラオスのビエンチャン空港に着いたら、タイの空港とは比べものにならない程、小規模で、何もない印象を受けた。「空港がこんな感じだったら村はどのような感じなのだろう」と一気に不安が大きくなつた。七月二十五日、ホームステイ先のポンミー村へと移動した。いよいよ四日間のホームステイが始まった。対面するまで、どんな家族だろうとワクワクした。五人家族で、十八歳の唯一英語のできるフッティー、十三歳の大人びたジェニー、八歳の元気なボビー、そしてパパとママ。最初に指さし会話帳を見せると、一生懸命コミュニケーションを取ろうしてくれた。その姿を見ていると、私が英語に逃げていてはダメだと思い、なるべくラオス語で伝えようと決心した。

ホームステイ中一番大変だったのは、トイレが水洗ではなく、自分でたらいの水をすくって流すことだった。ラオス人はこれが日常なのだと思うと、状況を理解することが出来素直に受け入れられた。もう一つは、風呂についてだ。シャワーではなく、たらいに溜まっている水をかぶることだった。日本では、蛇口をひねれば水だけではなく、湯が出ることが当たり前なのに、蛇口すらないことが衝撃だった。しかし、すぐに慣れることができた。

一方、食事は、意外と困らなかった。生ものが食べられないと伝えるとしっかりと野菜は煮てくれ、魚は焼いてくれた。私のために料理に工夫をしてくれて、ありがたいと思うと同時に、自分の意志を伝えることが必要だと感じた。いつも、家族みんなで食卓を囲み、私もその輪に加わることが出来、少しずつ距離が縮まるのが嬉しかった。カオニヤオ（もち米）を使いおはぎを作ると、甘い物が大好きなラオス人が喜んでくれ

たのが、印象的だった。また、ラーメンを作ると、野菜を切るのを手伝ってくれ、ボビーが夢中で食べている姿を見ると、食べ物で絆が深まることがあるのだと思感した。

私は、この体験事業を通して「人の温かさ」を一番強く感じた。日本人の私たちを村全体が包むように歓迎してくれ、受け入れてくれたことは、ラオス人の心の広さがあつてこそだと思う。日本人は一つ一つ事細かに気にするが、「どうにかなる」という考え方もあるよいと思う。心に少し余裕があると、いろいろな世界が見えてくることを学んだ。

私には、将来「外交官になる」という夢がある。ラオスで教えてもらった「相手を大切にし、思いやる」という心をずっと忘れずに胸の中に留めておきたい。夢を叶え、再びラオスの地を訪れる日を想像し、今を生きたい。



キッチン



ホストファミリーと 本人：右から 2 番目

団員が感じたこと

ラオスを訪ねて

出水高等学校 1年 柳 ひな子

7月24日。私は初めての海外ということもあり、言葉は通じるのだろうか、環境大丈夫だろうか、ホストファミリーはどのような人だろうか、他にも様々な複雑な感情が入り混じる中、日本を出発しました。それから七日間にわたるラオスでの生活をしていく中で感じたことが三つあります。

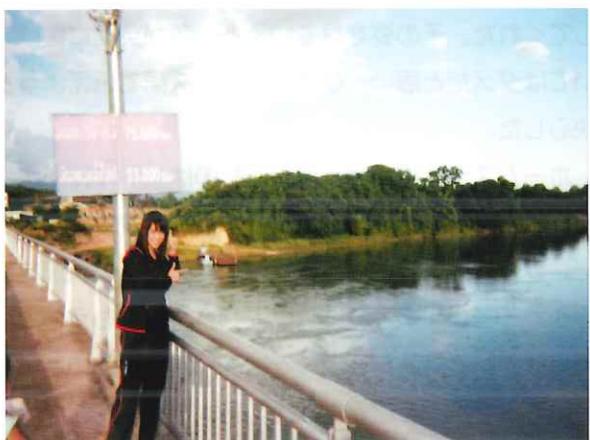
まず一つ目はラオス人の人柄です。とにかくおおらかで優しく温かい人たちでした。いつも笑っていて、小さのことまで気を配ってくれたり、私が正しいラオス語を話すと、手をたたいて喜んでくれる、こんなラオス人に出会えたことは本当に大きな出会いでもあると感じました。

二つ目は、環境の違いです。一番印象に残っているのは舗装がいきとどいていない赤土の道路でした。ラオスの人によると、雨の日は道路が土なのでべちょべちょになり、車やバイクでの移動が困難なこともあると聞いて残念な気持ちの一方でどうにかしたいという気持ちも生まれました。しかし、何も協力できない大きな問題であり、政府にお金が少ないなど色々な視点でとらえ情けないなあと少し感じました。また、トイレやお風呂も不便だと感じました。家によって違うけれど水洗トイレではなかったり、シャワーがなかつたり、町でれば有料のトイレがあつたりと日本とは全く違いました。最初は慣れない部分もありましたが、いつのまにか慣れている自分がいて、ラオスの生活が決して不便で満足できないということではないと実感することができました。反対に今の私たちの生活は贅沢すぎるのではないかと思いました。今の私の生活を見直す良いチャンスになりました。

三つ目は青年海外協力隊の活動視察で病院を訪れたことです。そこで様々な医療の話もきくことが出来ま

した。衛生管理の面では、正しい食事・飲み物・健康指導が行われているということを聞いて安心しました。その一方で驚いたことがあります。それはお母さんたちが赤ちゃんを生んでから一日もしないうちに家に帰る人がとても多いということです。日本では考えられないことなのでびっくりしました。

最後に今回のこの事業に参加する機会を与えてくれた両親に本当に感謝しています。また、事前研修から最後まで関わって下さった全ての関係者の方々に感謝しています。私はラオスでのホストファミリーとの別れがまだ忘れられません。本当に帰りたくなかったです。だからまた絶対にラオスで会うと約束したので絶対に行こうと思います。そしてラオス語もさらに話せるようになって行きたいと思いました。そして今回の事業で培ったラオスの知識を少しでも多くの人に広めたいです。そしてラオスの人の生活の仕方を尊重しつづけたいです。



メコン川



ポンミー村の夕日

ラオスで体験できしたこと

尚志館高等学校 1年 久保 日向子

私が今回ラオスにいって本当にいろんなことを体験することができました。

初めは、少し暑くて建物も小さいのがおおく、発展途上国は日本と比べてしまうとまだ発展が遅れているんだなとおもっていました。ですが朝になって街になると、携帯を片手に歩いてる人がいっぱいいてとてもおどろきました。

ホームステイ先のポンミー村というところはまだ道が舗装されてないところも多く、まるで遊園地のアトラクションのようだと感じました。ですが空の青色と、道路の赤土の赤色と、道に生えている草の緑色がとてもきれいで村の人達もとてもやさしく、村全部で1つの家族のようでとてもあたかくてみんながみんな支えあっているという印象をうけました。

ラオスの人達はいつものんびりとしていてやさしくわらっていて、とても困りながらでしたが、言葉のわからない私にも指差し会話帳を指差したりして色々なことをおしえてくれました。

青年海外協力隊の方の現場を視察させていただいたとき、初めはパークグム郡病院に勤めていらっしゃる高木とも子さんのお話をきかせていただきました。パークグム郡病院は1995年設立で周りの53村からの患者を受け入れていて、健康管理のできた規則正しい食事や健康指導に重点をおいて活動をしているそうです。高木さんは助産師をされていて郡病院の母子保健科で勤務されています。パークグム郡はビエンチャン市の端っこに位置していて川幅が広いメコン川の支流であるナムグム川が流れているので川を渡つて来なければならぬ人は船でわたらなければならぬためアクセスが悪いという課題をおしえていただきました。ですがアクセスの悪く病院にこれない人たちのために母子保健改善プロジェクトというプロジェクトで8村を巡回されているそうです。広場などで検診等を行うと村からトラックで10~20人の人達が一度に来るのが印象的というお話を聞くことができました。高木さんは母子手帳への関心がまだ低いラオスの人達に母子手帳の必要性を伝え活用できように指導をされ、ラオスの人達とよりそいながらよりよい医療のために尽く

されていることがわかりました。私がラオスの病院の中で驚いたのは、病室内にナースコールがなく、用事がある人は大声で看護師を呼ぶか壁に貼つてある救急の電話をするということでした。また、だんだん減ってきてはいるものの乳幼児の死亡率がまだまだ高く、日本では見ることのできないそんなラオスの病院の現状にとても胸が苦しくなりました。

私は今看護師を目指していて日本の病院で当たり前のこともラオスではまったく違つてあり、全ての病院の目指すところは病院を利用することによってみんながさらに健康になることだと思いました。そのためには日本はこうしているからなどの押し付けは絶対にしてはダメで、みんなで協力をしながら良いまちをつくっていくことが大切だと感じ、将来青年海外協力隊として発展途上国のお手伝いをしたいという気持ちがさらに強くなりました。

今回ラオスへ派遣していただいたお陰で今までの人の接し方、考え方が180度変わったと思います。この事業を企画してくださった方、同行者のみなさん、そして応援をしてくれた両親へ感謝の気持ちをもちながらこれからもいろんなことを吸収していきたいと思います。



助産師隊員の高木さんの活動視察 本人：左から3番目



寺院にて 本人：右

団員が感じたこと

共に学び共に考える

内之浦中学校 1年 榎屋 夢

私がこの国際協力体験事業に参加した理由は、世界の国々で活躍している青年海外協力隊の隊員がどのような活動をしているのか興味があり、実際に見てみたかったからです。そして、私の母がこの体験事業の第一回目の団員として参加し、興味深い話を聞いていたからです。

出発が近づくにつれて、本当に大丈夫なのかなあと不安な気持ちでいっぱいになり、出発する時は涙が出来ました。しかし、ラオスに到着した途端に不安だった気持ちがワクワクする気持ちに変わりました。

この体験事業で、四日間のホームステイも体験させていただきました。ホームステイは、とても優しいホストファミリーとの出会いから始まりました。みんなでトランプで遊んだり、一緒にご飯をつくったり、楽しい時間を過ごすことができました。また、お父さんにはお寺や市場などにつれていってもらいました。お寺は、日本のお寺と違いとてもカラフルなお釈迦様の絵が飾ってあり、驚きました。満月の日には、シンという民族衣装を着て寺に集まり、おかしや水、カオ・ニヤオとよばれるもち米をお供えするということを教えてもらいました。市場には、魚や果物、織物など様々なものがところせましと並べてありました。

私が今回ラオスに行き、一番印象に残っているのは青年海外協力隊の助産師の方の話です。「上から目線で日本の技術を提供するのではなくて、相手と共に学び共に考えるということを大切にしています。」という言葉が強く印象に残っています。また、病院で出産することのできないお母さんが多いため、出生児の死亡率が高いということが問題だと感じました。環境のせいで十分な医療が受けられないのは、かわいそうだと思いました。同じく青年海外協力隊の日本語教師の方も、一生懸命活動していました。日本とは言葉も環

境も異なる中、ラオスの人たちにそこでできることを懸命にされる姿に感動しました。「誰か」のことを考えて「誰かのために」働く…そんな素晴らしい未来を、私も生きてみたいです。私は幼い頃から医師に憧れており、将来は医師になりたいと思っています。帰りの飛行機の中では、相手の気持ちや生活に寄り添った最高の医療を提供できる医師になりたいと、強く思いました。

これから私は、今自分のできる事、やるべき事一つ一つを丁寧に全力で取り組みます。そして必ず自分の夢を叶えます。

最後に、このような貴重な体験をさせていただき、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



レストランにて 本人：中央



寺院にて 本人：後列 左

団長報告

鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書

公益財団法人鹿児島県国際交流協会
総務企画課長 稲富 郁夫

鹿児島の14名の中学生・高校生をラオス人民民主共和国へ派遣する事業が無事実施できましたことにつきましては、共催市・協賛企業の皆様及び報道関係者を含め同行者の所属機関の皆様の御理解・御協力によるものと、感謝申し上げます。団員の事業参加に御理解を頂いた保護者の皆様、現地で私たちを暖かく迎えてくださったラオスの皆様、ホームステイでやさしく面倒を見てくださったポンミー村の皆様及びこの事業を詳細まで計画・調整してくださった関係者の皆様にも感謝申し上げます。そして、今回の事業に参加しラオスの多くの方々と交流を通じて国際理解や国際協力について学んでくれた団員の全メンバーにも感謝申し上げます。最後に、団員の活動に理解を持って記録してくださった報道関係者を含め、団員の面倒等に尽力いただいた同行者の皆様にも感謝申し上げます。そして、お疲れ様でした。

団員の皆さんには、事前研修では、初めて会う団員達と仲良くやっていけるのだろうかと不安を感じながらも、初めて訪れるラオスで披露するパフォーマンスについての打ち合わせや練習に頑張りました。7月も中旬になる頃には、学校の行事と同時進行で派遣の準備もしないといけない、ラオス語の勉強もしないといけないという毎日、不安を感じながら過ごした団員もいたと思います。

このような不安を抱えた状態での出発だったと思いますが、いざラオスに着くとそんな不安も忘れて現実のラオスを体験することになりました。

青年海外協力隊の2名の隊員の活動現場やJICAラオス事務所の視察では、ラオスで生き活きと働いている隊員等の姿に、将来の自分の姿を重ねた団員もいたかも知れません。

ポンミー小学校や村主催のお別れ会等での交流を目にしたときに、日本の子ども達とラオスの人達との心のつながりを感じることができました。

4泊あったホームステイでは、団員全員が、第1日

目から言葉の壁に当たったことだと思います。そして、生活様式や習慣の違いに大いに戸惑ったこと思います。しかし、ホームステイも数日過ぎた頃には、団員の誰もがラオス語の指差会話帳を使ってホストファミリーと意思の疎通ができるようになっていたのには驚きました。

このような体験こそが、ラオスを自分なりに理解できることにつながり、日本、そして鹿児島を見つめ直す良い機会となつたことだと思います。そして、自分なりの国際理解・国際協力のあり方を考えてくれることにつながると思います。

今回の派遣が団員の今後の活躍の源となってくれることを期待したいと思います。

最後に、親切にしてくださったラオスの皆様、ありがとうございました。



村長と入村式で 本人：左



ホストファミリー等々と 本人：左から3番目

同行者が感じたこと

皆さんに2通り

青年海外協力隊ラオス〇Ｂ 坂本 渉

今回のラオス訪問、私にとっては、協力隊として派遣、帰国して以来13年ぶりでした。

その間、ラオスは経済成長を遂げ現在でも7%の成長という、ラオスを多少なりとも知る私から見ると驚くような変化を遂げています。実際、ビエンチャンの街中は多くの車で溢れ、交通渋滞が起き、物価も3倍以上に、聞くところによると、公務員、会社員の所得もそれに見合う以上の上昇になっているようです。今回ホームステイさせて頂いたポンミー村でも、何台もトラック、乗用車があり、裕福な家庭がいくつも見られました。

それでも、今回参加された団員たちから見ると村の状況は、当然ながら、日本とはかけ離れたもので、道路は雨が降ればドロドロ、晴れれば埃だらけ、ラオスではいいほうに入る道路にしても、日本と比べればデコボコ、トイレはナニコレ、ほんとの水浴び。おまけに言葉はほとんど通じない。そういう状況の中で、団員たちの多くが、言葉の壁、生活環境の壁を前に、少なからず、“ヤダ、もう帰りたい”と思っていたのではないかと思います。

しかし、適応力に優れた団員たちは、一晩を何とか耐え、翌日からは、その適応力を見せてくれました。相変わらず、“こう言いたいんですけど、どういったらいいんですか？”と、当然ながら聞いてくるものの、その表情は言葉が通じないという逆境を楽しんでいるようにも見え、非常に嬉しい気持ちになりました。

現地での交流活動についても、団員それぞれが、どうしたら喜んでもらえるか、真剣に考えて行動し、素晴らしい結果を出してくれました。

ポンミー村を発つ朝、団員たちが別れを惜しむ姿に、本当に来て良かったと感じました。言葉の壁、生活環境の壁を克服し、村人とわかりあえたことは、団員たちの中で無意識に作っている心理的な壁を取り去り、そんなの何とかなるよ。という自信を持たせてくれたのではないかと思います。

途上国への援助について、疑問を持った団員もいました。ラオスが日本みたいにならいやだ。という声も聞かれました。私はラオスが日本のようになることはない、物質的に豊かでもラオス人はそうなることを望まないと思います。

重要なことは、その国の人々が、自分の国がどうなってほしいと思っているかです。相手の立場に立って考えた支援が必要です。正直、私の接したポンミー村の人々の幸せに、大きく欠けているものが何かあるだろうか。と感じます。

ラオスでは物質的、経済的に恵まれているとは言えない環境にあるにも拘らず、多くの人が幸せな表情を見せてくれ、物質的に恵まれた日本から来た私たちを歓迎し、精一杯もてなしてくれました。団員たちは、そのギャップを埋める答えをなんとなく感じ取ってくれたのではないかと思います。これからも、より良い答えを求めて欲しいと思います。

今回の訪問にて、歓迎してくださった村人の皆様、大事なお子さんを託してくださった保護者の皆様、素晴らしい成長を見てくれた団員たち、共にこの訪問を実のあるものにしてくれた同行者の皆さんに感謝致します。このような素晴らしい機会を与えていただいたことに感謝致します。



ホストファミリーと 本人：左



同行者と 本人：右

鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書

青年海外協力隊ラオスOG 大坪 まみ

青年海外協力隊員として2年間過ごしたラオスを再び訪れることができました。このような機会をくださったみなさまに感謝しています。今回、1年半ぶりに訪れるラオスにとても興奮しました。飛行機に乗りラオスが近づくに連れて、これからどのような体験や驚きがあるのだろうと子供たちと興奮していました。ビエンチャンからポンミー村へバスで約2時間。町から離れるに連れて、自然が広がり赤土の凸凹道や道路に牛や犬、家の軒先で家族が過ごしている姿を見て、協力隊の時に過ごした任地を思い出し、とても懐かしさを感じました。

ポンミー村に到着しホストファミリーとの対面。子供たちの表情がこわばり、緊張しているのがとても伝わってきました。これから1週間どのようになるのかと心配をしましたが、子供たちの適応力の素晴らしさ、パワフルさに心配することはないと思いました。みんなの素敵な笑顔と身振り、手振り、ジェスチャー、旅の指さし会話帳を使ってコミュニケーションを取っている様子にお互いに何かを伝え、理解しようとしている姿に感銘を受けました。

ホームステイでは、急遽2人が滞在することになりましたが、とても暖かく迎え入れて下さいました。ホストファミリーの家は沢山の布を扱うお店で、お客様が夜遅くまで訪れ忙しく仕事をしていました。そんな中でも私達やお客様と沢山の話をし、布のこと、機織り機のことなど沢山のことを教えて下さいました。また、家族みんなの食事ではラオスのこと、日本のこと、自分たちのことなど話が止まらず毎日楽しく夜更かしをしました。また、子供たちがシン（ラオスの巻きスカート）を着たいと思っていることを伝えるとともに喜んでくださいました。私も着てくれたらうれしいと話し、村の方の協力のもと子供達全員分のシンを1日で作ってくださいました。お別れ会ではシンを着た子供たちの姿を見て「とてもきれい、かわいい。日本から来てくれた人達がシンを着てくれるのはとても

うれしい。」と話してくれました。

この短い1週間で日本では経験できないたくさんのことを見学することができたと思います。毎日、子供たちが目を輝かせ、経験したこと、驚いたこと、うれしかったことなど沢山の話をしてくれました。きっと沢山の世界が広がったと思います。この時間を一緒に共有できたことは私にとってとても貴重な時間となりました。

最後にこのような機会を与えて下さった関係者のみなさま、同行者や団員のみなさま、ポンミー村で出会えたみなさまに感謝します。本当にありがとうございました。

自分自身が色々なことを感じさらにラオスが好きになりました。また、ポンミー村を訪れたいと思いました。今回、鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加して経験したことを今後に生かしていきたいと思います。コーブチャイライラーイ。



ホームステイ先で 本人：右



お別れ会で

同行者が感じたこと

好奇心を支えるもの

青年海外協力隊フィリピンOG 後藤 まどか

25年の節目のこの体験事業への同行任務に抜擢していただいたことに、まずは心から御礼を申し上げる。そしてこの事業に参加したいと決意し、自ら応募した団員たちの「好奇心」、また何よりも、ご家族の方々の「ご理解」と「ご協力」に改めて敬意を表する。

第一回研修の日、初めて団員たちの表情を見た。なんと若いんだろうと（当たり前なのだが）率直に驚いた。海外旅行も初めてだと言う子もいると聞く。あどけない団員たちがどうして途上国に惹きつけられたのか、非常に興味深かったのと同時に、団員たちの後方で心配そうな表情を浮かべるご家族の姿は、私のなかの2年前の記憶を呼び起した。肩書きの通り、私はつい4か月前まで青年海外協力隊としてフィリピンで活動していた。2年前、私も途上国へと出発する前には、家族や友人としばしの別れを惜しだものだ。特に祖母には「危なくなるのね？」と最後の最後まで不安がられた。私の2年間の協力隊生活は、家族へどれだけ心配をかけたのかと問われると、頭が上がらない。勿論、草の根レベルながらも任地の人々と共に汗を流し涙を流した2年間に、一片の悔いもない。ただ、こうした活動を経験できたのは、鹿児島で私を見守ってくれた家族が「理解」してくれていたからこそだと感謝の気持ちでいっぱいだ。団員たちのご家族におかれても、真にこの事業を「理解」してくださったからこそ、大切な子供たちをこの事業に預けてくださったのだと思う。昨今の世界情勢を鑑みると、いつどこで何が起きてもおかしくはない。事故に遭わないか、変な病気にかかるか、テロ行為に巻き込まれないか、きっとご家族は不安であつただろう。だが、ラオス派遣から8日目、鹿児島に戻った団員たちはどうだろうか！見違えるようにたくましく、すがすがしい表情であった。彼らを目の当たりにしたご家族は、安堵すると同時にさぞ驚かれたことであろう。

私は、日々成長する団員たちにいつも感動していた。鹿児島代表、日本代表である14名だという自負も勿論あるだろうだが、彼らは何事にも「興味」をもっててくれた。だからこそ、どんな場面も、どんな壁にも、立ち向かっていった。ホームステイ初日、言葉も通じないところに連れ去られたときはさすがに皆、不安を募らせた。私もそうだ。英語も通じない、アルファベットでもないラオス語に、高すぎる言葉の壁を感じた。しかしどうだろう。2日目、3日目と、団員たちは徐々に村に、そして家族に馴染んでき

た。村の小学校との交流では、実に堂々と出し物をやってのけた。教師も児童も見事に巻き込んだ。ラオス語での自己紹介は勿論、特技のバイオリンや伝統舞踊、ダンス、歌にリコーダーに書道、おはら節、これをまた公民館でのお別れ会で大人相手でも臆さずに楽しそうにやってのけるので、本当に感心した。ホームステイ最終日、団員の誰もが涙を流した。「帰りたくない」と、ラオスの家族との別れを惜しむ姿がそこにはあった。「またラオスに行きたい」「ラオスに青年海外協力隊としてまた来たい」こんな言葉が団員から聞けるなんて、初日の彼らからは想像もつかない。勿論、私もラオスの虜となっていたのだが。

冒頭に述べた通り、この事業は25回目の実施を終えた。そしてこの第25回目を同行させていただき、団員たちの見違える成長と多くの気づきに触れた。団員たちには是非とも、この事業を通して感じたこと、考えたこと、疑問に思ったことを忘れないでいただきたい。そしてそれを、周囲に伝えていただきたい。得た経験と知識を、周囲に還元することも大事な使命である。さらに、私たち大人は、これまでたくさんの団員たちが築いてきた歴史をもっと周囲へ開示し、これからの方々に示していくべき道を示していくねばならない。子供たちに「興味」や「好奇心」をもたせられるよう、多くの方々に「理解」していただけるよう、微力ながら私も努めしていく所存だ。

最後に、この事業に携わる事務局や関係各所の皆様、稻富団長、坂本さん、大坪さん、西さん、西さん、そして団員の皆さん、本当にありがとうございました。コブチャイライライ。



シンを着て 本人：左



ホストファミリーと 本人：左から2番目

生の現場と想像力

株式会社南日本新聞社 記者 西 悠宇

ホストファミリーの家に着いてすぐ、サッカーユニフォーム姿の20歳の次男が身ぶり手ぶりを交えて「行きたいところはないか」と聞いてきた。熱心に誘う家族の笑顔に押され、バイクで市場に向かった。

村の市場は想像よりも大きく、活気にあふれていた。ゴザに積まれたたくさんの野菜、おけに入った大きな魚、炭火焼の鶏、屋台。食材は日本の中と似ているようで、どれも少し違う。あたりには香草の混じったアジアらしい香りが漂い、夕焼けに染まる空の向こうで雷が鳴った。村たちは優しい笑顔を見せ続けていた。

ラオスを思い出す時、初めに浮かぶ風景だ。出発前、ラオスについて本やインターネットで調べ、いろいろ想像してみた。それでも、やはり「現場」は実際に訪ねてみると分からぬ。雄大な大地の上で、人々がしっかりと生きていることを肌で感じた。

視察した青年海外協力隊の葛藤ややりがいも、実際の現場で生の声を聞くからこそ伝わるものがある。「厳しい現実を知るばかり。でも、ラオスでの経験はこの先の人生に必ず生きると思う」。悩みながらも、前を向く助産師の高木とも子さんの充実した表情が印象に残った。「地域ぐるみで見守る姿は、日本が見習うべきもの」「次の仕事はアフリカか日本かで迷っている」という姿は国際人そのものだった。

「寄り添う姿勢が大切」。支援を考える際、必ずついて回るこの言葉の重みを生徒たちも十分に感じた様子だった。「よく聞く言葉」は、ともすれば「知った氣」になりがちだ。しかし、生徒たちは自分たちの好きな村、あるいは自分の将来に関わる課題として、「どう発展することが幸せなのか」を真剣に悩んでいた。人の話を聞き伝える記者として、実直に考える姿勢に背筋が伸びた。

村ではラオスの急速な発展や親日ぶりを実感できた。若者の大半はスマートフォンを手にしていた。8年前に同じポンミー村を訪ねた同僚に聞くと、車は村に数

台しかなかったというから全く違う様子だった。一方で、バブル景気で農地を手放したり、都市で若者の薬物乱用が問題となっている話を聞くと、知らない国に変わりそうでやはり寂しかった。選ぶのは誰でもないラオス人だとしても。

社会の知らない何かを知った後、さまざまな背景に思いをはせる「想像力」が増す。同行した協力隊OBの人たちの話も、行く道と帰る道では違う響きを持っていた。ほんやりとしかイメージできなかった国が、実感を伴うものとして分かったのだ。

帰国し、ラオスでのASEANのもうがニュースでよく流れた。行った全員が村人の顔を思い出したはずだ。「国際協力」の言葉の響きも、行く前とやはり違う。たった7日間だったかも知れないが、得た実感や想像力は大きな財産だ。

最後に、個性派ぞろいの一行をトラブルなくまとめた同行の人たちには頭が上がりません。本当にお世話になりました。ありがとうございました。



取材中の様子 本人：右



ホームステイ先で

同行者が感じたこと

人生肥やした一週間

株式会社鹿児島放送 記者 西 萌々佳

「ラオス」。何もピンとこない。調べても何もピンとこない。それくらい私にとってラオスは遠い、異国の、別世界でした。

入社2年目。初めての海外取材で、1人でカメラを回しての取材。

正直不安しかなかった私ですが、出発前の研修時、子供たちの期待に胸を膨らませたきらきらとした表情を見て、気持ちが少し軽くなりました。「もしかして、とても楽しい取材になるのでは？！」その気持ちは、現地到着2日目に一挙に打ち砕かれることになります。

ポンミー村に到着。それぞれがホームステイ先に散らばると、取材云々の前に、私もホストファミリーにとってはただの日本人であるということを思い知られます。同行者という名目にあぐらをかき、ラオス語を全く勉強していなかった私。「近所に1人生徒がいることはわかっている。でもなんて言って出よう。そもそも私は何者と思われているのだろうか」言葉にできない思いが悶々と募る中、ジェスチャーと指さし会話帳で何とか伝えると、「OK。車に乗って」よし！通じた！しかし明らかにどこか違う場所に向かっている。結局着いたのは田んぼ。家にその時いなかった家族に会いたいと言ったと思われたようで、田んぼで働いていた家族を紹介されたのでした。途方に暮れる私。夜は虫がいる中で水を浴び、ヤモリも挨拶にきました。「絶対あと3日も無理。」それがホームステイ初日の感想です。しかし翌朝、へこたれることなく元気な子供たちに驚愕。見習わなければと心を入れ替えたのでした。。。結局、ホストファミリーとは「ありがとう」「おいしい」の2単語を繰り返す日々でしたが、日を重ねるごとに不思議と表情やジェスチャーで会話はできるようになり、虫や水浴びにもすっかり慣れ、初めて異国の人とこれほどまで絆を深めた4日間となりました。別れの時は生徒並に涙を流してしまったほどです。

今でもよく、ホストファミリーはじめラオスの人々のことを思い返します。でもそれは、いつもの旅の終わりに思い出に浸るようなものというより、もう2度と会えないかもしれない人たちの表情や声、温もりを忘れないように、思い返して心に刻みつけています！

子供たちの楽しさ、成長した姿、ラオス人の人の良さ。都合上2日のみの特集となつたため伝えきれなかつた部分は多かったと思いますが、私が見たものが少しでも伝わればと思い原稿を書いたつもりです。

今回は本当にいい経験でした。ありがとうございました。



取材中の様子 本人：左



寺院にて 本人：左

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣 旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に還元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

6 経費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国(地域)	派遣期間	人数 (生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキナバル、セラマンドゥ)	平成3年 3/27(水)～4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、阿久根市、名瀬市、市来町、伊集院町、郡答院町、内之浦町、佐多町	公募
第2回	マレーシア (スブルンバラ)	平成4年 3/27(金)～4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、鹿屋市、大口市、指宿市、隼人町	公募
第3回	マレーシア (クチン、ラガアイル)	平成5年 7/23(金)～7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、加世田市、三島村、隼人町、志布志町、高山町	公募
第4回	インドネシア (バンツン、バシルカット)	平成6年 8/1(月)～8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市、出水市、指宿市、垂水市、菱刈町、霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタキナバル)	平成7年 7/30(日)～8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市、国分市、穂枝町、宮之城町、隼人町、吾平町、根占町、中種子町	公募
第6回	マレーシア (タイソン、ハリットモントリー)	平成9年 7/27(日)～8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市、串木野市、東市来町、伊集院町、郡山町、日吉町、吹上町、金峰町	市町村推薦
第7回	マレーシア (クチン、ラガアイル)	平成10年 7/26(日)～8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市、大口市、国分市、菱刈町、姶良町、蒲生町、溝辺町、横川町、栗野町、吉松町、牧園町、隼人町、福山町	市町村推薦
第8回	タイ (アユタヤ、ルンカーオ)	平成11年 7/30(金)～8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市、指宿市、加世田市、喜入町、笠沙町、知覧町	市町村推薦
第9回	タイ (チエンマイ、メーカンボン)	平成12年 7/24(日)～7/31(月) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、国分市、垂水市、祁答院町、財部町、末吉町、串良町	市町村推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン、フーコイ)	平成13年 7/20(金)～7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市、出水市、加世田市、国分市、垂水市、祁答院町、溝辺町	市町村推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン、ダナン)	平成14年 8/4(金)～8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市、串木野市、枕崎市、国分市、垂水市、溝辺町	市町村推薦
第12回	タイ (叻併央ー県を予定していた)	平成15年度 SARS 及び鳥インフルエンザの影響により中止			市町村推薦
第13回	マレーシア (ケラル州、マラカ市、トルガ洲)	平成16年 7/19(月)～7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市、枕崎市、国分市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第14回	ベトナム (ハノイ、ホーチミン省モードン村)	平成17年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、枕崎市、串木野市、国分市、知覧町、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第15回	マレーシア (ケラル州、マラカ市、州)	平成18年 7/22(土)～7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市、枕崎市、霧島市、知覧町、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第16回	ベトナム (ハノイ、バグダン省、バケン省)	平成19年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市、枕崎市、霧島市、いちき串木野市、南さつま市、知覧町、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第17回	ラオス (ビエンチャン県ボンニー村)	平成20年 7/20(日)～7/27日(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第18回	ラオス (ビエンチャン県ナソソ村)	平成21年 7/19(日)～7/26日(日) (7泊8日)	18名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、いちき串木野市、南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第19回	インドネシア (南スラウェシ州ビハバサ村)	平成22年 8/1(日)～8/8(日) (7泊8日)	19名 (13)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南九州市、南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第20回	マレーシア (ケラル州バグダン州ラガ村)	平成23年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、いちき串木野市、南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第21回	ベトナム (ホーチミン、ホーチミン省ゴイ村)	平成24年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南九州市、南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第22回	ベトナム (ダナン市、ホアン市)	平成25年 7/21(日)～7/28(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、いちき串木野市、南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第23回	カンボジア (プノンペン、バッタンバン)	平成26年 7/20(日)～7/27(日) (7泊8日)	23名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第24回	カンボジア (プノンペン、カンダール)	平成27年 7/19(日)～7/26(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、いちき串木野市、南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第25回	ラオス (ビエンチャン都、ビエンチャン県)	平成28年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南さつま市、南九州市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
	計6カ国	計(315) 平均13人			



裏表紙デザイン：上之門 優里（川辺高等学校 3年）

【イラストに描かれているもの】

ラオスの民族衣装シン・交流したポンミー村の子ども達・ラオスの主食カオニヤオ（もち米）

ラオスの国花チャンパー・背景ラオス国旗モチーフ

=編集・発行=

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

〒892-0816 鹿児島県鹿児島市山下町14-50

かごしま県民交流センター1階

公益財団法人鹿児島県国際交流協会内

担当：直岡 佳奈、福永 みゆき

TEL：099-221-6620 FAX：099-221-6643